

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005  
東京都東大和市高木3-315-1-2-2  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

## Rising up , TOHOKU!

2018年(平成30年)8月16日 木曜日

無料

# 第75号

毎月発行

発行 2018年(平成30年)8月16日 木曜日

### 【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

#### 【砂越 豊】

宮城県生まれ、64歳、経営コンサルタント、趣味は縄文研究、今年1月に『東北先史時代学』を提唱、東北から日本を変えることを標榜する。また放置されている縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。



## 東北再興は理屈ではない、情念の爆発だ！

## 1300年前の蝦夷の勝算なき反骨心を取り戻せ

### 連載企画⑧ 【東北先史時代学】

#### 東北衰退は想像以上だ

地方の衰退が話題となつて以来、実際にその現場を東北で目の当たりにする機会も増えた。それは被災地ではない。そこにはある種の賑わいがあるのだ。

端的にいえば、巷間言われている以上の衰退に襲われている東北の小さな町の状況に立ち尽くす。そうした場面が多々あり、呆然としてしまう。

これは、東北の中核都市ではまだあまり目立たないが、そこから少し離れた小さな町では、想像以上に惨憺たる状況であることを知らない人が多い。したがって、想像と現実のギャップに面食らうということなのだろう。

それは、ひとこと話題となったシャッター通りならまだいいという状況であり、荒れ放題の空き地が目立ち、町が崩壊しつつあるという印象を強く持つ。この状況を何とかしたい

と思う住民や関係者も多いだろうが、「出口」は容易に見いだせない。

誰しも、活性化した町の賑わいが好きであるが、そうした可能性を見いだせない現状を突きつけられると、諦めしかなくなり、本来皆が持つ基本的な楽観主義は、身体の内底に押し込めなければならぬ。

そうした空気が、さびれた町全体を覆うのが現場では実感できる。

そして、いま東北は変革するか、消滅するかの二者択一の岐路に立たされている。けつして誇張ではない。

しかも、選択肢は一方のみに偏る。他方の可能性はゼロに見えてしまう状況が続いている。

これらのことは東北の町をつぶさに見れば、容易に理解できる。

#### 変革を動かすのは情念

こうした現状に直面して、どんなに理屈をこねても無駄である。坂道を転げ落ちてくる大

きな岩を見て、理屈をこねくり回すのに似ている。まことに滑稽な図式だ。

理屈は、ありきたりの常識に通じる。非常事態でその陳腐な常識を振り回されても鼻白む。

理屈抜き、身体の内底から湧き上がる情念のよう可能性がある。

前述のように、この悲惨な状況からの「出口」は容易に見つからないのはだれもが認めるのだから、そうした情念は勝利なき暴発に見えるかもしれない。

では、諦めて何もせず、大岩が転げ落ちていくのを眺めているだけなのか。

筆者はとも耐えられない。望みは小さくても、やらなくてはならないことならば、ドン・キホーテのようにチャレンジするしか選択肢はないと考える。

そのときには「計算」が入り込む余地はない。「計算」を働かせるならば、最初からチャレンジはしない。こうした情念の大いに減

退した社会が現代の日本ともいえる。目先の小さな勝利ばかり追いかけ、上から俯瞰すると、より大きな勝利のチャンスを失う近視眼発想が跋扈する社会には嫌気がさす。

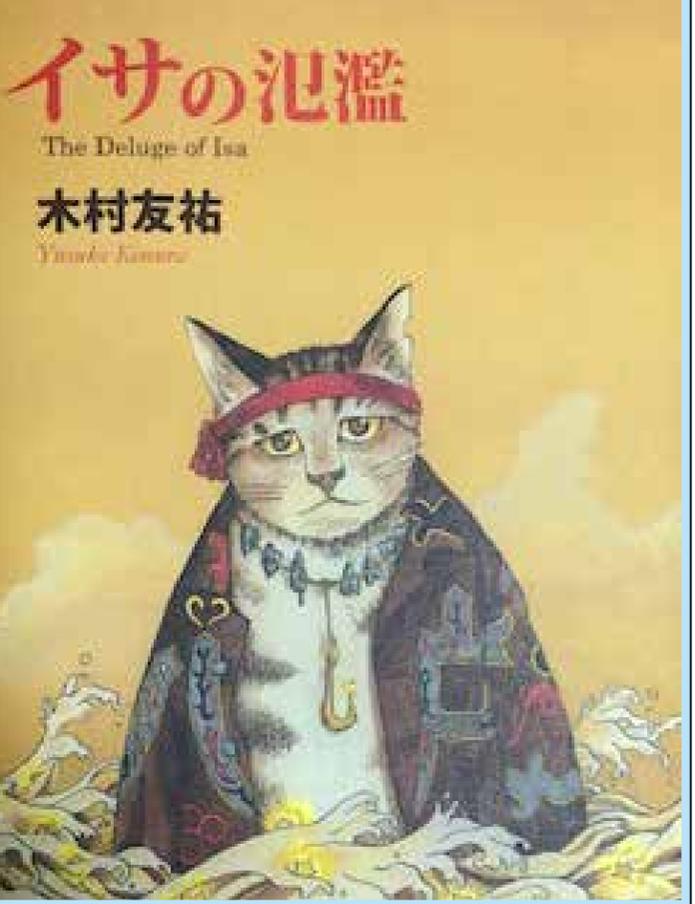
#### 「イサの氾濫」

以前、当新聞でも取り上げられた「イサの氾濫」という小説を手にとってみた。

この小説は、第25回三島由紀夫賞候補にもなった。あらすじとしては、4代になつて東京での生活に行き詰まりを感じていた主人公の将司が、そのころ頻繁に夢に出てくるようになった叔父の英雄(イサ)について調べるため、地元の青森の八戸にむかった。どこにも居場所のなかった「荒くれ者」イサの孤独と悔しさに自身を重ね、さらに震災後の東北の悔しさを身にも乗り移らせた彼は、ついにイサとなつて怒りを爆発させるというものだった。

筆者は何より最も刺激を受けたのは、この勝算なき情念の爆発であった。その小説の場面に直面して、還暦を過ぎた筆者は、いつか知らず知らずに、ありきたりの常識のワナにはまっていたことに気づき、はっとさせられた。

物事を動かすのに、ましてや、より困難な状況を開く場合には、計算やつまらぬ常識はじゃまとなる。そうしたものの残滓が心のなかに残っていると、



イサの氾濫  
The Deluge of Isa  
木村友祐  
Tomoko Kimura

切っ先が鈍る。対応する手段も無難なものとなり、結局のところ大勢に流され、初期の変革の目的は果たされずに、最終的に失敗に終わることがほとんどだ。だからこそ、小説中のイサという人物の、無軌道の情念爆発というのにはとっさとさせられたのだ。

そして、そのイサの魂が乗り移ったような主人公の情念の爆発にも、これまで心の奥底にひた隠しに隠してきた己の心の存在に気がついた。

#### 1300年前の蝦夷の勝算なき情念

蝦夷の歴史を掘り起こしていくと、このイサのような情念爆発に共通のものがあつたと想像させる出来事に出会う。あまり知られていないが、

八世紀前半、大和朝廷の圧倒的な軍力に立ち向かっていく蝦夷の姿勢こそ、この情念なのだ。多賀城という強固な軍事拠点が設置される直前、大和朝廷に大打撃と大シヨックを与えた、連続する大反乱があつた。

まったくの無計画というわけではなかったが、しかし、その動機は確かな勝算があつたものではないと考えられる。では、何が当時の蝦夷を駆り立てたのか。

身体の内底から湧き上がる情念であり、蝦夷のなかの芯のなかの芯からわき起こるエネルギーではなかったか。

アイデンティティーとかいうような概念化されたものではなく、もっとドロドロとした生命さえも超越した

ものに突き動かされたのであろう。それが何であつたのか、今後追及していきたいと考えている。

#### 東北再興に必要なもの

翻つて、現代の3・11後の東北を見よ。何をされても耐えるだけの、積極的な動きを示さない姿勢からはいったい何が産まれるのだろうか。そもそも、そうした立ち

あがるエネルギーが枯渇しているのだろうか。「良い人」は止めようよー東北！と言いたい。みなイサになれ。イサに続け！

そして、お仕着せの東北復興策や、きれいでいごの地方創生で再び中央集権の枠組みのなかのさびれた東北にとどまるのを止めよう！

# 「未曾有」と「想定外」は二度と聞きたくない

## 災害予知と気象予報と自然災害対策の大変革提言 「自然は未知である」という大前提に戻れ!

**また想定外の自然災害発生：大阪の地震と西日本豪雨**

西日本で、予期せぬ自然の大災害が連続して発生した。

まず、今年六月十八日朝、高槻市や茨木市などの大阪府北部で震度6弱の地震が発生した。

犠牲者は4人、負傷者は7府県で428人にのぼった。また朝の通勤ラッシュ時に重なったこともあり、多くの電車やエレベーターでも閉じ込め事案が発生した都市型の直下地震として課題を残した。まさに大混乱だった。

関西はめったに地震がない、大地震は少ないという思い込みのスキを突かれた大地震だった。今後は、こうしたことは言えなくなつたのではないかと。地震はいつでも、どこでも発生するということを思い知らされた地震であった。

そこに追い打ちをかけるように、七月六日から八日にかけて、西日本を中心に記録的な豪雨が降った。降り始めは、だれもがそれほど豪雨になるとは思わなかったようだが、あつという間に、その規模が想定をはるかに越え、被害も、通常の豪雨という範囲を越えてしまった。

200名以上の犠牲者が出るなど甚大な被害を出した一方で、高速道路の途絶も発生し、広範囲で街が破

壊された。

あちこちで堤防が決壊し、家の二階まで、洪水による水かさが増した。また、豪雨が去ったあとの街々の様相も一変した。まるで3・11の津波の後の様相だった。

これらはまた、「想定外」の自然災害と位置づけられるのだから、もう「想定外」という言葉を耳にしたくない気持ちでいっぱいだし、そして思うのだ。自然災害というものに対して大きな誤りを犯しているのではないかと。

3・11からまだ七年しか経っていないのに、あの経験をもっと忘れてしまったのかという残念な思いもどうしても抑えることができない。

### 自然の大災害は現代の科学で予測できるのか?

あまり大きなニュースにならなかったが、昨年、地震予知について大きな発表があった。少し長い以下引用する。

**東海地震の発生が予知され首相が「警戒宣言」を出す。こんな制度ができて40年近くたつのに、その前提となる科学的根拠は危うい。ずっと続いてきたこの状態が、ようやく見直されることになった。国の中央防災会議の調査部会が、「南海トラフ沿いの大規模地震の予測可能性について」という報告書をまとめた。**



「現時点においては、地震の発生時期や場所・規模を確度高く予測する科学的に確立した手法はなく、大規模地震対策特別措置法に基づく警戒宣言後に実施される現行の地震防災応急対策が前提としている確度の高い地震の予測はできないのが実情である」

別で、地震予知の可能性があると説明してきた。報告書で「困難」といえば、東海地震予知だけは、わずかながら可能性があるという解釈の余地が残る。今回の報告書はそうだった。前回は「できない」という言葉でばつさり切った。(瀬川茂子・朝日新聞編集委員・2017.9.1WEB抜粋)



つまりは、地震予知はできないとの明確な宣言である。「可能性がある」と言わなければ研究が獲得できないといった理由が許されるかどうかを追及する前に、まずは自然の大災害は現代の科学で予測できるのか?という質問を投げかけたい。

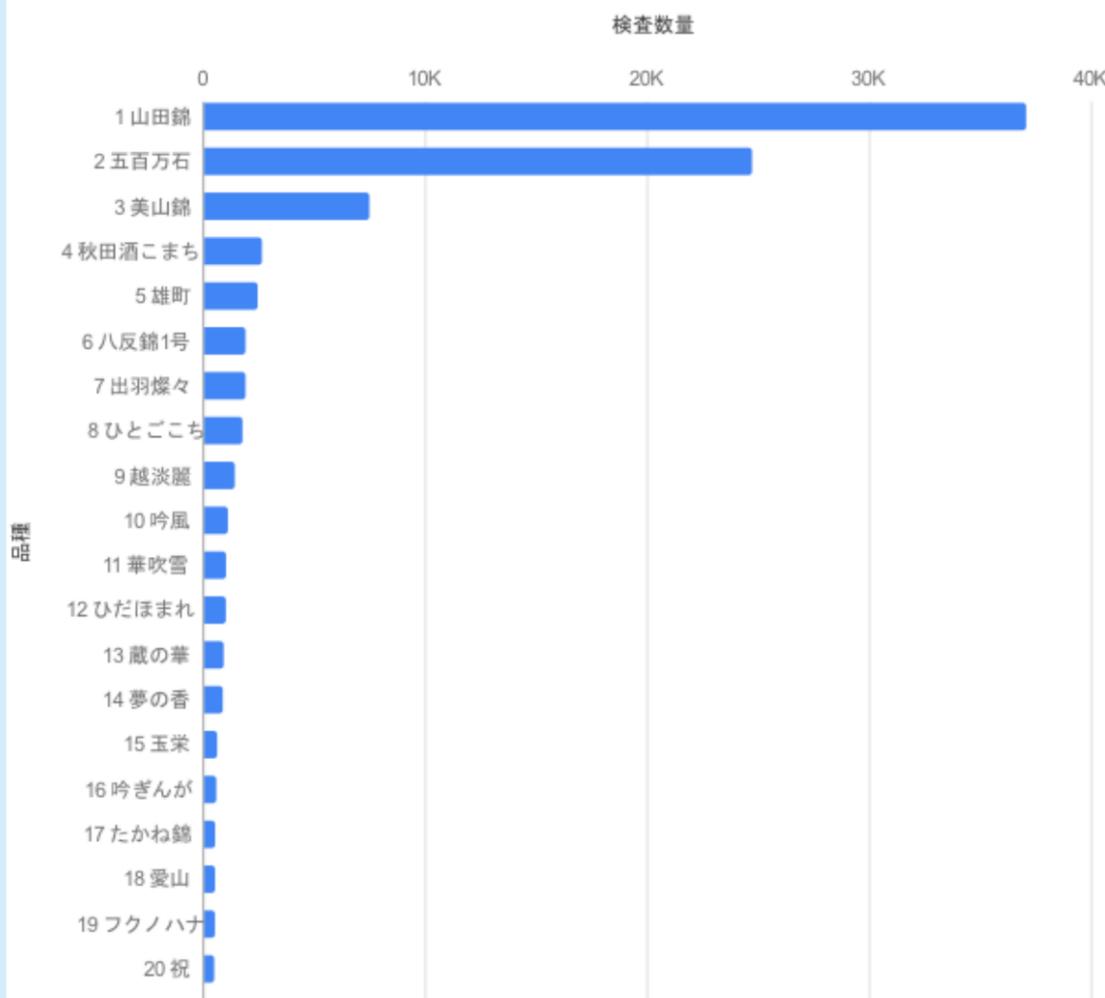
筆者としては、現代科学では無理だと言いたい。あるいは、ほんの一部の予測に限られると。可能性があるという話ならば、東日本大震災もある程度予想できたはずなのに、あの時は可能性ゼロだった。そのときの反省が継続していなかったことに驚き、怒りを抱くほどである。ましてや、まだ他の地域では可能性あるなどという発言は犯罪レベルと言わざるを得ない。

単なる研究ではなく、人命に関わる予測なのである。この点を無視した能天気な研究と、それを真に受けたメディア報道で、すっかり国民は惑わされ、被害を大きくしていったこと反省して欲しいものだ。



自然の運行を予測できるといのは傲慢ではないか? 地震予知に限らず、自然災害を予測できるというのが近代科学の傲慢ではないかと最近つくづく思う。たかだか百数十年間の気象観測で、この地球の自然の運行のどれほどが理解できたというのだろうか。あまりにも楽観的すぎて、マンガチックでさえある。科学を気象観測というわずかしい分野に適用してきたらたつたの百数十年。地球の歴史は45億年。比較的对象にさえなりえない。こうした近代の人間の姿を客観的に、突き放してみれば、観測データからすると、予知はこうなるというように控え目な予測に徹する。しかし、日本の自然観測記録は、過去に遡れば、資料として千年近く存在するので、それらを現代科学的脈絡のなかで再編集して、現代の気象予知や自然災害予測に役立てる。今後はこの分野に力点を置く。こうした変更に関しては、研究者だけに任せてはいけない。研究を理解しつつ、厳しく管理できる組織がリードしていくべきである。研究者を無意識に人命を損なうような立場にさせなくてはならないし、それは研究者にとつても国民にとつても大いなる不幸である。

2016(平成28)年度醸造用玄米検査数量(トン)  
出典:平成28年産米の農産物検査結果(速報値)(平成29年3月31日現在)



## 酒米種類 日本種豆知識 次回の三陸会は9/1

今回は、酒米の種類について取り上げてみます。左記のグラフは2016年の醸造用玄米検査数量ですが、それによれば、酒米銘柄別で見ると山田錦、五百万石、美山錦で7割近くになり、とても偏っています。上位3位で7割、あとは2%台が3銘柄、残り10%銘柄で占める、という割合です。ここ2、3年で5位から8位が変動しています。

**山田錦(不動の1位)**  
兵庫県を始め26府県で栽培されていますが、兵庫県産が圧倒的に多く、6割以上を占めています。粒が大きく、心白が大きいので高精米に向くとされています。現在全国新酒鑑評会で受賞する酒のほとんどが山田錦を使ったものとなっています。栽培量の多さ、酒造りへの適性ともにダントツで、「酒米の王様」と言われています。

**五百万石(2位)**  
20府県で栽培、新潟県が全体の約半分を占めています。粒が小さいが心白が大きいため高精米に向きません。すっきりとした味わいの酒になりやすいとされています。雄町を祖先に持ちます。  
**美山錦(3位)**  
長野県、秋田県をはじめとする8県で栽培されています。淡麗な酒が出来やすいとされています。祖先に亀の尾、万石があります。

## 第48回

### 水産業再興のための料理レシピ紹介 《白身魚のフライとトマトソースかけ》

彩りが、赤、緑の鮮やかな原色のところに、きつね色と、夏ですね。目を刺激し、そして食欲も刺激しますね。

(砂)



郷土料理愛好家  
松本由美子氏

【材料】 <2人分> 白身魚 2切れ、トマト 1個、トマトジュース 50CC、酒 小1、砂糖小1、生姜(すりおろし)小0.5、醤油 大1、味醂 小1、酢 大1 ☆ボールに材料を全て入れてよく混ぜる

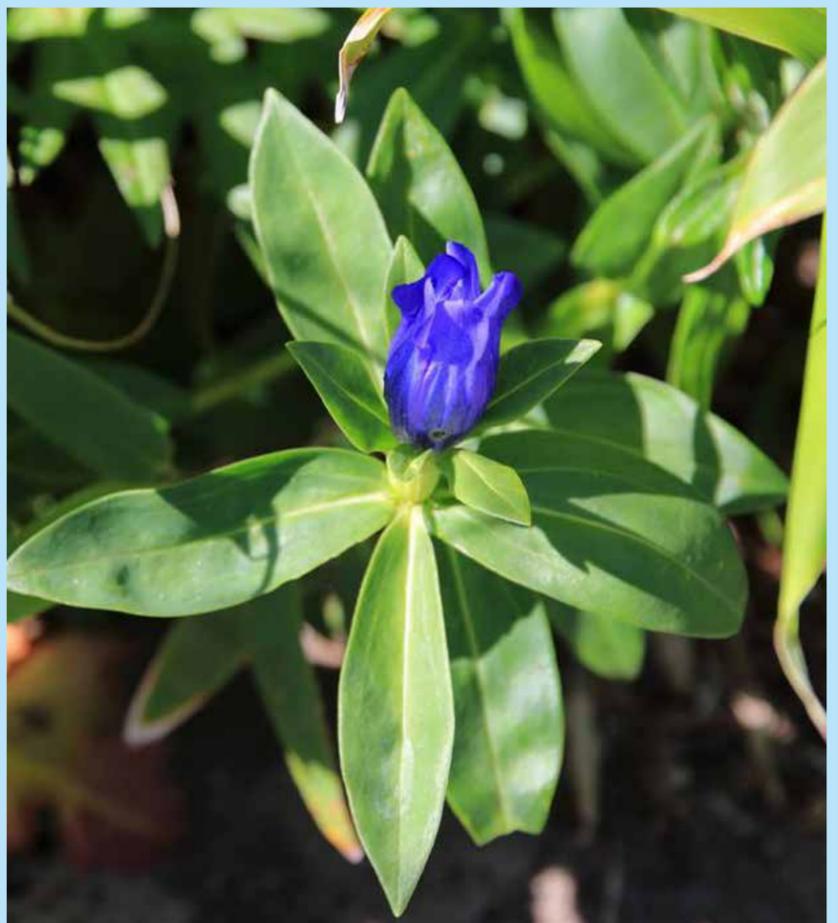
【作り方】 ① 白身魚を洗い、水気をふきとる。魚に片栗粉をまぶし、油でキツネ色になるまで揚げます。

② 魚にソースを和えます。



写真でお伝えする  
**東北の風景**  
(夏の山と花々)

写真撮影  
尾崎匠



# 「ファンクラブ」活用 ④岩手、秋田、青森県編

東北のファンクラブ、最終回の4回目は岩手県、秋田県、青森県の北東北三県である。三県まとめて一度に紹介できることから分る。これまで紹介してきた南東北三県と比べるとファンクラブの数自体は少ないが、その中にはなかなか個性的なファンクラブがいろいろ存在している。

## 岩手県 I G R 銀河ファンクラブ

http://www.igr.jp/wp/other/EP%BD%89%EF%BD%87%EF%BD%92%EF%8A%80%EF%8B%3%EF%83%95%EF%82%A1%EF%83%B3%EF%82%A1%EF%83%A9%3%83%96

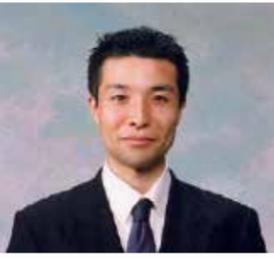
盛岡駅と青森県の目時駅を結ぶI G R いわて銀河鉄道の利用促進、沿線地域の活性化、交流人口の拡大を目的に活動しているファンクラブ。会費は個人会員が年間2000円、子ども会員が年間1000円、賛助会員が年間20000円で、会員への特典も充実している。

具体的には、①I G R いわて銀河鉄道直営店舗での飲み物などのサービス、②個人会員への初回I G R オリジナルキャラクター「ぎんがくん」「きりりちゃん」がプリントされたモバイルバッテリー、I G R オリジナルパスケース、リールクリップ、ストラップのプレゼント(モバイルバッテリーとパスケースはファンクラブ限定品)、子ども会員への初回ハンドタオルのプレゼント、③2年目以降更新の会員にはI G R 1日フリー乗車券のプレゼント、④賛助会員への盛岡駅でのB1判ポスター掲出1か月無料サービス、⑤継続年数に応じた会員証のグレードアップ、⑥会員証の提示による

## 執筆者紹介

大友浩平 (おおくま ひろへい)  
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。  
「東北ブログ」  
http://blog.livedoor.jp/anagna51

Facebook  
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



る提携施設における各種特典、⑦毎年1回「ファンミーンティング(会員の集い)」の開催、⑧「銀河鉄道まつり」での会員限定のプレゼント、⑨年2回会報誌「銀河ファンクラブマガジン」の送付、⑩岩手の鉄道会社ならではの岩手旅、こだわりのI G R 沿線旅の会員特別価格での提供、となっている。

## 三陸ファンクラブ

http://www.sanrikutetsudou.com/?page\_id=28

岩手県の沿岸、三陸海岸を走る三陸鉄道を応援するためのファンクラブ。会費は個人会員が1年2000円、5年9000円、家族会員(4名まで)が1年4000円、5年18000円で、会員特典としては、①三陸鉄道のイベント、商品の情報などを伝える「さんてつ笑顔だより」の年4回の送付、②裏が三陸鉄道の1日フリー乗車券になっている「三陸ファンクラブ会員証」の送付がある。

## なかほらファンクラブ

https://nakahora-bokujou.jp/assets/img/fanclub/files/fanclub.pdf

岩手県岩手町の北上山地で「山地(やまち)酪農」という、牛舎がなく牛が年間を通して山で自由に過ごすスタイルの酪農を実践している「なかほら牧場」のファンクラブ。年会費は10000円で、会員特典としては、①年2回(誕生日とその半年後)、なかほら牧場の商品(送料込500円以上分)の進呈、②ファンクラブイベント(不定期)の開催、③会報(不定期)の送付、④会員証の発行、⑤オンライン店舗で使えるお得なクーポンの進呈がある。

## いちのせきファンクラブ 「あばいんクラブ」

http://www.city.ichinoseki.iwate.jp/ijyu/abain\_club/

岩手県の内陸南部にある一関市が運営する、「一関に行ってみよう・もっと知りたい」という市外在住の一関ファンに一関を知ってもらい、楽しんでもらうた

## 遠野ファンクラブ

https://dekurasu-tono.jp/

岩手県の内陸中部にある「民話の里」として知られる遠野市で、「遠野を知りたい!遠野に行きたい!遠野に住みたい!という人たちにいつでも遠野を身近に感じてほしい、移住・定住を応援する市民(サポート市民会議)と行政(遠野市)が一体となった定住推進組織」である「で・くらす遠野」が運営するファンクラブ。ファンクラブ会員は、「で・くらす遠野市民」に登録するという形で、年会費(1000円、5000円、10000円)に応じた特典が得られる。

## 大槌応援団 OCHAN'S

http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2016090200075/files/kho633\_Part3.pdf

岩手県の沿岸、三陸海岸中部にある大槌町が運営する、「おおつちファン」の交流サイト。「おおつちファン」とは、大槌町民と、大槌に関わりや関心のある人のことで、「大槌応援団 OCHAN'S」は、おおつちファン同士の交流、連携を深めるためのサイトである。おおつちファンによるサイトの活用を通じて、大槌の魅力が全国に発信される仕組みになっている。

## 雲石ファンクラブ

http://www.town.shizukuishi.iwate.jp/fanclub/

「雲石ファンクラブ Net」は岩手県の内陸北部にある雲石町の観光ポータルサイトの名称である。従って、会員特典などは存在

めファンクラブ。会費は年間10000円で、会員特典として、①「あばいんクラブ会員証」の送付、②市広報誌や観光パンフレットなど一関市関連情報の情報誌の送付、③主要観光施設の特別割引、④一関市の旬の情報を紹介するメルマガの配信、⑤市内宿泊施設利用券10000円分、一関名物の餅料理の食事券2000円分、選べる特典2000円分の送付、が提供される。

## なかほらファンクラブ

https://nakahora-bokujou.jp/assets/img/fanclub/files/fanclub.pdf

岩手県岩手町の北上山地で「山地(やまち)酪農」という、牛舎がなく牛が年間を通して山で自由に過ごすスタイルの酪農を実践している「なかほら牧場」のファンクラブ。年会費は10000円で、会員特典としては、①年2回(誕生日とその半年後)、なかほら牧場の商品(送料込500円以上分)の進呈、②ファンクラブイベント(不定期)の開催、③会報(不定期)の送付、④会員証の発行、⑤オンライン店舗で使えるお得なクーポンの進呈がある。

## 遠野ファンクラブ

https://dekurasu-tono.jp/

岩手県の内陸中部にある「民話の里」として知られる遠野市で、「遠野を知りたい!遠野に行きたい!遠野に住みたい!という人たちにいつでも遠野を身近に感じてほしい、移住・定住を応援する市民(サポート市民会議)と行政(遠野市)が一体となった定住推進組織」である「で・くらす遠野」が運営するファンクラブ。ファンクラブ会員は、「で・くらす遠野市民」に登録するという形で、年会費(1000円、5000円、10000円)に応じた特典が得られる。

## 大槌応援団 OCHAN'S

http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2016090200075/files/kho633\_Part3.pdf

岩手県の沿岸、三陸海岸中部にある大槌町が運営する、「おおつちファン」の交流サイト。「おおつちファン」とは、大槌町民と、大槌に関わりや関心のある人のことで、「大槌応援団 OCHAN'S」は、おおつちファン同士の交流、連携を深めるためのサイトである。おおつちファンによるサイトの活用を通じて、大槌の魅力が全国に発信される仕組みになっている。

## 雲石ファンクラブ

http://www.town.shizukuishi.iwate.jp/fanclub/

「雲石ファンクラブ Net」は岩手県の内陸北部にある雲石町の観光ポータルサイトの名称である。従って、会員特典などは存在

しないが、雲石町内の観光スポットなどについて分かりやすく紹介されている。

## 秋田県 大館能代空港ファンクラブ

http://www.odate-noshiro-airport.com/cgi-bin/fc/index.cgi

大館市産業部移住交流課が事務局を務める大館能代空港利用促進協議会が運営するファンクラブ。入会金、年会費は無料で、メール会員になると、空港のおトクな情報や空港周辺のイベント情報などがメールで届く。入会と同協議会のホームページ「大館能代空港どっと混む」から可能。

## 秋田犬の「ファンクラブ」

http://mono.zero-date.org/fanclub/

秋田県大館市の大町商店街にあるゼロデータアートセンターに在る、「あいにいける秋田犬」である「の」が好きな人のためのファンクラブ。オンラインで会員登録で、イベントでの割引や会員限定の特典が用意されている。

## 青森県 七戸ファンクラブ

http://www.shichinohe-kankou.jp/nanacard

青森市の東、八甲田山の東麓に位置する七戸(しち

## 青い森の翼ファンクラブ A-wing

http://www.pref.aomori.lg.jp/kotsu/traffic/aoinorinotsubasafanclub-a-wing.html

青森県が運営する、「青森空港と三沢空港、青森県にある2つの空を応援してくださる方々とともに、青森の空を盛り上げていくためのファンクラブ」である。入会金、年会費は無料だが、入会すると会員限定の特典が得られる。

## 地酒 FAN 倶楽部

http://www.aomori-sake.or.jp/jizake-fan-club/

青森県酒造組合が運営する、1. 青森の地酒を知り、飲み、楽しみ、伝えること!!、2. 青森の文化を知り、飲み、楽しみ、伝えること!!、3. 青森の食を知り、食し、楽しみ、伝えること!!、の3つの趣旨に賛同する20歳以上の人であれば誰でも入会できるファンクラブ。

## 無料青森空港有料ラウンジが利用できる

無料で青森空港有料ラウンジが利用できる、③航空情報やイベント告知、お得意な旅行商品の情報などが載ったメルマガジンの配信、④県が主催する航空関連イベントに会場された人などを対象とした会員限定グッズの配付、⑤会員限定イベントへの参加やツアーへの応募ができる、といった特典がある。

## 具体的には、①会員証の交付、②搭乗前に使える青森空港有料ラウンジの無料クーポン券の交付(年4回、

無料青森空港有料ラウンジが利用できる、③航空情報やイベント告知、お得意な旅行商品の情報などが載ったメルマガジンの配信、④県が主催する航空関連イベントに会場された人などを対象とした会員限定グッズの配付、⑤会員限定イベントへの参加やツアーへの応募ができる、といった特典がある。

# 例えば仙台で歴史遺産を保存、復元または破壊する事

去る七月七日、本誌の執筆陣にも馴染み深く、幾度となく「とにかく東北を語る会」の会場にもなつてきた仙台的喫茶店・星港夜にて「四ツ谷用水」に関する座談会、シンポジウムとも言える催し(企画『仙台ふららん』)が開かれた。

NHKの人気テレビ番組『プラタモリ』の仙台編(二〇一五年七月放送)にて坂道はじめ地形・地理の造詣深いタレント・タモリ相手に仙台という都市の成り立ちについて興味深く解説し見事な案内ぶりを示した皆川典久氏(建築家及び「東京スリバチ学会」主宰)。



奥羽越後氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

当時仙台在住であった、「四ツ谷用水 光と影」の著者である大和田雅人氏、そして彼らと結びつけた他ならぬ星港夜マスター・齋藤匠氏を合わせた三人を中心に、市内で用水関連の様々な活動を展開する人々、番組や書籍で関心を持った人々の意見交換も交えながらは終始和やかながらも、仙台愛と学究熱に満ちた空気の中進行した。

当座談会の議題は、忘れ去られていたかに見えた四ツ谷用水がいかに再発見され、またその想いが受け継がれてきたか。そして四ツ谷用水復活の展望と、その実現を阻んできた障害の実態について。

まずは、四ツ谷用水とは一体何なのか。私なりの理解の上で述べてみたい。

仙台の四ツ谷用水とは、水源の遠い原野に町を作り出す為にどうしても必要な都市の血管にも当たるものであった。宮城野の海岸側に津波被害の歴史がある事を知った政宗は、海から遠く奥まった、広瀬川の作る崖の上の河岸段丘へ都市建設を決める。河が崖下にある事で、水が自然には確保できない状況から、政宗は広瀬川の上流から河岸段丘野にかけての水路建設を計画したのである。

上流の水路入口から、四つの谷に水道橋をかけるなどの技術で難所を克服し、原野に張り巡らされた用水路は、あたかもそれがむしろ自然の摂理で、運命でもあったかのようにその地を潤し、それまで歴史上不毛であった地を東北最大の都市の礎へと変えたのだ。

皆川氏は、「自然の河と人工水路の違い」について、人工水路は水を管理・調節する事ができ、水に常に触れられる事が利点であるとし、故に都市を形成する水路としては人工のものがより優れているのだと説く。

城下町の中の四ツ谷用水は常に路面にその姿を現しながら、ある所では食卓の清水となり、ある所では水を車を回す工業用水、またある所では洗濯用水にと、あらゆる用途に活躍し、本来の「杜の都」の中の不可欠の風景となった。

しかし、明治以降は当然の事ながら近代的な上・下水道が仙台にも配備され、四ツ谷用水は衰退し暗渠化された。八〇年代、佐藤昭典氏という一人の人物が用水の存在をその著書で世に知らしめ、復活運動のきっかけを作る。何度か実際に一部の流れの再生を試みられたが、全て挫折している。

その実現を困難にする障害とは、まず水の利権の問題であるという。四ツ谷用水が衰退した後も、農業用水・工業用水として使用されていたが、仙台市の領分であった農業用水の役割が失われると利権は工業用水を受け持つ宮城県に完全に渡った。県と市の関係というのは全国的にみても良くないものらしく、市の問題である四ツ谷用水の為に、職員が県に掛け合うというのは非常に渡られる事、らしいのである(ある方の情報では、県は間もなく工業用水の利権を手放し、民営化されるという)。省庁間や部署間の連携が欠けるといふ所謂「縦割り行政」構造には大いに悩まされてきたという事で、下の部長・係長クラスに掛け合っても難しく、事を動かせるのは首長しかいない、志ある人物に権限を与える事が何よりも重要だ、という話もあった。

水が衰退した後も、農業用水・工業用水として使用されていたが、仙台市の領分であった農業用水の役割が失われると利権は工業用水を受け持つ宮城県に完全に渡った。県と市の関係というのは全国的にみても良くないものらしく、市の問題である四ツ谷用水の為に、職員が県に掛け合うというのは非常に渡られる事、らしいのである(ある方の情報では、県は間もなく工業用水の利権を手放し、民営化されるという)。省庁間や部署間の連携が欠けるといふ所謂「縦割り行政」構造には大いに悩まされてきたという事で、下の部長・係長クラスに掛け合っても難しく、事を動かせるのは首長しかいない、志ある人物に権限を与える事が何よりも重要だ、という話もあった。

そもそも、何のために四ツ谷用水の復活などという事を目指すのか、と大抵の人は始め疑うだろう。単なるノスタルジーじゃないのか、と。だから当局は本気で取り合わず、活動は実を結んでこなかったのではな

いか、と。ところが関連の文献を読み、話を聞いていくうちにこれは郷愁や妄想と言っ

片付けていい問題ではないと思えてきたのだ。

そもそも、四ツ谷用水は

何故衰退し、仙台市民の生

活風景から消滅したのだろうか。最も大きな要因は、明治「維新」後の仙台が新政府側の支配を受けた事で

ある。戊辰戦争敗北後、仙台藩の要職にあった人材は処刑・投獄または北海道などへの離散を余儀なくされた。そして後釜に入った新政府側の人間が、長い年月の間に培われた都市の構造を理解しようともせず、破壊し改変し始めたのである。二百年以上に渡りあり得なかつた汚染と邪魔な旧設備と見做しての工事という名の破壊に晒され、地下に消えていった四ツ谷用水こそが、それまでの仙台という都市の死を意味する代名詞だったのだ。

大和田氏のもとに寄せられたという便りの中に、このような声があった。「仙台がいい町なかがどうか自信が持てなかつたが、四ツ谷用水の詳細を知り、

本町の仙台は覆われていたのだ、とようやく悟つた」

実際、こうした「仙台の良さが今ひとつわからない・自信が持てない」という声は珍しいものではない。

その原因は、現在に至るまで長く言われ続けてきた、「古いもの、良いものを残そう」という

「東京のマネばかりで独自性、自立性がない」「プライドばかり高く、東北の他地域を見下す」

などの特徴にあるかも知れない。しかし、人々はいま

その「古いもの」を「独自の(地元の)視点で、」プライドに凝り固まった」

だがそもそも、仙台人は

本来自古に物に関心がなかつたのだろうか。私は近年のこの動きに、長年ある種の屈辱に耐え、また都市に

憚る矛盾に違和感を禁じ得なかつた仙台人の、意識する

か否かにかかわらず一世一代の冒険的な、反中央の意志を垣間見るのである。

仙台と、東北他県の都市を大きく隔てるのは、その都市規模以上に、未だ強く

残る、幕末の新政府軍による蹂躪と支配の爪痕である。敗軍の本拠地であると同

時に、この地は多賀城の時代から中央による東北支配の要であった事から、殊更に中央政府の威を示す場所として仙台が必要とされたのだと思われる。

伊達の支配した明治以前の仙台側と、明治以降の中央側との対立構造は、他ならぬ仙台城本丸跡に今も鎮

座する宮城懸護国神社の存在に見る事ができるかも知れない。言うまでもなく、靖国神社の支社的存在であり、中央による支配の象徴的存在でもある。天皇、中央政府の為に戦った人々の

みを祀り、仙台藩士を未だ賊軍として排除する当社に

対し、仙台市は仙台城の土地が独占されるのを防ぐ為に交渉し一部の土地を買い上げるなどの措置を取っている。本来仙台城本丸に祀られていた藩祖・政宗の霊も云わば追放され、代わつて地元の有志が北山の政宗

所縁の寺・東昌寺敷地内に青葉神社を建てた事からも、本来の仙台の姿を破壊したままの、中央政府による支配の形は、継続したままという事になるだろう。

本来、伊達氏とは源頼朝に従い東北を征服した坂東武者の末裔であるが、政宗以来代々藩主の平泉藤原氏に対する強い関心と崇敬の念は、幾度も平泉建築の修復や篤い保護活動に窺う事ができる。

伊達氏に「蝦夷」的なるものへの憧憬があったとは断言できないが、明治政府による開発・発展の反面に支配と抑圧を様々な形で受け続ける仙台領民の意識には複雑な感情が積もっていたに違いない。四ツ谷用水とは長年に渡り封印された先住民の想いの象徴であり、その復活とは本町の仙台の再生、更には東北の復

座談会終了後、同席者同士の雑談・親睦の機会があり、その中で石巻市のサンファンパウテイスタ号の話

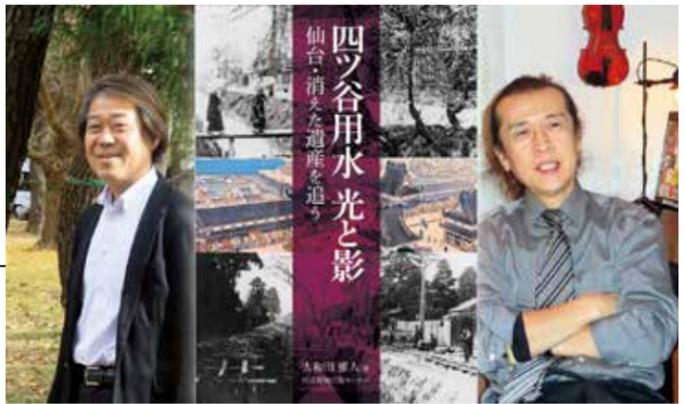
も出た。一九九〇年代に復元された政宗時代の洋式帆船(ガレオン船)で、世界的にも貴重なものだが、建造後三十年が経とうとする今、激しい腐食と老朽化により最近、県が遠からぬ

この夢のような復元は当時の県知事が宮城県出身で「箱物行政」の勢いもあって実現したようなのだが、

大阪出身の現在の知事にとってはあくまで保存、という概念はないかも知れない。

ただ皆川氏・大和田氏が共に主張した一言が強く印象に残った。県や大組織を動かす為には、それぞれの

立場にとって大きなメリット・魅力がある事を示す必要があり、また市や組織に責任や労力を押し付けるのではなく、声を上げた市民自身が責任を持ち、働く姿勢を見せる事が大切だ。



大和田雅人氏の著書をはさんで皆川典久氏(左)、星港夜・齋藤匠氏(『仙台ふららん』HPより)

長年、多くの人々にとつて仙台をつまらない町、好きになれない町にしてきた大都市の抱えるジレンマ。その一つ一つに仙台人は不器用にも立ち向かい、あるべき町の姿を取り戻す為の戦いを始めている。結果的に四ツ谷用水復活が実現するか否か以上に、本来の東北に生まれ変わろうと奮闘する東北人の姿があるからこそ、仙台の魅力は本物となり、背後に広がる東北の地とともに世界中の心を惹きつける事になるのではないだろうか。



ヤマシャクヤクの実



ヤマジノホトトギス



ツリガネニンジン



サルスベリ



アリジゴク

シリーズ 遠野の自然  
「遠野の立秋」  
遠野 1000 景より

暦では立秋を過ぎた。今年  
の夏は、四十度という殺  
人的な暑さが襲ってきたり、  
台風がたて続けに来たりと、  
いろいろ忙しく、ゆつくり  
と夏を楽しむ余裕がなかつ  
た。そして気がついたら、  
夏もすっかり峠を越えてい  
たという感じである。  
徐々に暑くなりながら、  
カンカン照りのなかでセミ  
の声を聞き、夜の虫の音を  
聞く夏が恋しい。

少年時代を思い出して、感  
無量となる。  
\*  
今回の遠野は花盛りだ。  
ヤマシャクヤクの真っ赤な  
実、ヤマジノホトトギスの  
可憐な形、ツリガネニンジ  
ンの淡い紫、サルスベリの  
赤、レンゲショウマの白、  
ホツツジの小さなラッパの  
ような形に惹かれる。  
また、アリジゴク釣りを  
して楽しんだ頃を思い出す。  
そして古い石塔がここが遠  
野だと教えてくれる。



レンゲショウマ



石塔達



ホツツジ

# 東北先史時代学の実践プロジェクト④ 宮城県・涌谷町の歴史遺産を 掘り起こし、映像で共有し、町の内外に発信 する実践活動を開始!!

**東北先史時代学の実践プロジェクトの企画模索―長根貝塚保存活動の保留**  
当新聞七十二号の東北先史時代学の実践プロジェクトでは、長根貝塚研究を取り上げた。  
そこに至ったのは、東北縄文文化研究からの流れだった。長根貝塚は東北でも有数の縄文遺跡であり、ターゲットしても十二分に価値があり、探求していくのに満足いくものであった。しかし、長根貝塚は保存

**武家屋敷の活用方法検討**  
その後、同町にある保存状態の良い武家屋敷の活用方法検討に中心が移行した。そのときちょうど、この武家屋敷が町に寄贈されようとしており、その活用方法はいづれ話題になるであろうし、それを先取りした検討を開始しようと思いついたわけである。

**涌谷町の歴史遺産プロモーション映像制作に迫り着く**  
それから歴史遺産博物館検討プロセスにおいて、涌谷町に数々存在する歴史遺産の紹介用プロモーション映像制作し、涌谷町民をはじめとした関係者に見てもらおうという企画に没頭した。

**町ぐるみでの制作**  
また、別の特徴のひとつが、町を巻き込んだプロモーション映像を作るということだった。  
それは何よりも、涌谷町に数々ある歴史遺産を将来に亘って維持保存してもらい、かつ、これらの歴史遺産を町の活性化に活用してもらえないかと考えたからだ。  
町民と離れた状態でこう

状態のけつして良いとは言えない状況にあった。石碑と案内板があるだけで、だれも訪れないし、見捨てられたと思われるような歴史遺産だった。  
そこで勝手連として、この貝塚の保存活動を立ち上げようと考えた。  
しかし、そうしたぞんざいな扱いにもかわららず、国の史跡認定を受けており素人には容易に手を出せない場所だったのだ。  
また、長根貝塚をいろいろ調べていくうちに、これは専門家の手と膨大な予算が必要であることが判明してきた。  
そこで、長根貝塚保存活動を一旦保留とし、別のテーマを探索し始めた。  
しかし次のステップを見出すのに苦労することになった。

建物の維持保存費用や防火・防災、耐震措置に膨大な投資が必要なのに気づいたのだ。  
そうした投資を回収できないような有効な活用方法はなかなか見つからなかった。  
**涌谷町の歴史遺産プロモーション映像制作に迫り着く**  
それから歴史遺産博物館検討プロセスにおいて、涌谷町に数々存在する歴史遺産の紹介用プロモーション映像制作し、涌谷町民をはじめとした関係者に見てもらおうという企画に没頭した。

**町ぐるみでの制作**  
また、別の特徴のひとつが、町を巻き込んだプロモーション映像を作るということだった。  
それは何よりも、涌谷町に数々ある歴史遺産を将来に亘って維持保存してもらい、かつ、これらの歴史遺産を町の活性化に活用してもらえないかと考えたからだ。  
町民と離れた状態でこう

とはいえ、単なるプロモーション映像制作だけではつまらない。歴史遺産という以上、何らかの歴史的意味ある映像ができないものかと考え続けて、ようやく、オリジナルな企画に辿り着いた。  
つまり、歴史を掘り起こして、歴史遺産に新たな脚光を当ててみようということになった。

育委員会にお手伝いいただき、さらには町長や町議会議員にも趣旨を説明して、協力を取り付けた。  
多くのエキストラ募集にも協力を取り付けた。  
しかるべく手順を無視し、まったく乱暴なやり方ではあったが、さまざまなネットワークが活かされた。あちらこちらで、この映像制作の話を広めていったら、ようやく町中に少しずつ浸透してきたようだ。

という段に至ったが、残念ながら、トラブルが続出することとなった。  
何せ、本格的な映像制作など生まれて初めてのことで、どこから手を付けてよいものやら皆目見当もつかず、右往左往する始末。  
シナリオの書き方も分からず、それ以前の問題として、どうすれば映像制作を進行させていくのかもまったく分からず、さまざまな人に聞いて回る始末。  
映画界のことも教えてもらったし、いろいろ勉強になった。  
しかし、トラブルはそれ



横穴墓と豪族



12世紀はじめごろの「小田保」地図

ただ映像制作しても、町の活性化にはあまり効果がない。単なる観光用のツールとしてしか見てもらえないと考えたのだ。  
そのため、涌谷町民がたくさん出演する映画を考え付いた。  
そうすれば、町民の多くに見てもらえるのではないかと考えた。  
しかも、歴史遺産を深く学習するという目的も併せ持つ企画に発展していった。

あとは、当方の準備如何

ただにとどまらず、予定していた出演者との交渉は途中でストップし、また映像制作チームの編成にも大分手間取る始末であった。  
その混乱は現在も続いており、先行きが危ういが、あとはやる気だけで乗り切っていくしかないという覚悟を決めている。

**歴史遺産掘り起こしが深化**  
他方、具体的なシナリオを作成する過程では、あらためてこれらの歴史遺産の持つ意味がより深く理解できるようになったことは収穫だった。

いまでは東北の宮城県の片田舎である涌谷町という場所がどういった変遷を経たのか、そこにどんなドラマが展開したのかがわづかなら分かってきた。  
それによれば、この場所の歴史が約六千年も、間断なく続いていることが分かった。すごいことである。現在のさびれた状況とのギャップがすごすぎる。  
むしろ、過去にこそ、この町の輝かしさが秘められていたことに、いまさらながら気づくありさまである。さらに、古代において、この地が、大和朝廷と深く

結びついていることも分かった。  
そのことは逆に、当時、大和朝廷と対峙していた蝦夷にくさびを打ち込む役割も果たしていたということでもある。  
何という発見であろう。プロモーション映像制作の意義がより深くなった気がする。  
あとは、シナリオ如何であり、撮影と制作進行次第となる。  
構想倒れにならないように努力するしかない。